文芸プラザ

短編小説

確執の果て（上）

今井　隆

私が小学五年生になった時に、母は父と離婚していました。父は銀行員でしたが、集金先の飲み屋のママと不埒な関係になったらしく、それが母に知れてからは二人の間の会話はほとんどなくなりました。時には口論が始まり、父の投げた小皿が母の唇に当たって、前歯が欠けたということもありました。それを機に父の帰りはいっそう遅くなって、深夜になることが多くなりました。

私はだんだんと父を憎むようになりました。もともと性格が合わなかったのだと思いますが、父は私をあまり可愛がってくれませんでした。一二度父に海に連れて行ってもらったという記憶はありますが、その他は父と遊んだ記憶があまりありません。

父との思い出の中で一つだけ鮮明に残っていますのは、家を出ていくというその日に十メートルほど歩いた後で私を手招きし、父のところまで行くと、「お前は、何時まで経っても俺の子どもだからな。勉強、頑張れよ」と言ったことです。父はまだ何か言いたいように見えましたが、母が近づいてくることに気がつき、踵を返しました。頭は少しだけ前方に傾いており、肩の辺りが小刻みに震えていましたから、父が泣いているのだということが分かりました。とても意外な感じがしました。

母は、早く家に入りなさい、と私を急かしました。父がいなくなって、母との喧嘩の種が無くなったのだから平穏に暮らせると思う反面、家の中にがらんとした空間があるのを感じて、不安が込み上げてもきました。

何が父を堕落させたのかについては、まったく分かりませんでした。博打にも手を出していたらしく、その筋の男が返済を迫って家に乗り込んできました。母は二の腕に鷹の頭の刺青をした男を、がんとして跳ね返しました。私は、母のどこにそんな度胸があるのだろうかと驚きました。多少あった蓄財のかなりの部分を父が持っていったという話を母から聞きました。母はあまり感情を外に出さない性格でしたが、きっと泣き続けたのでしょう、時として瞼がはれていることがありました。私は少しおませな小学生の高学年でしたから、男と女の関係が今まで考えていた以上に不安定で不潔なものであるということを強く思うようになったのでした。

母の背が私よりも低くなっていることに気づいたのは、国鉄の駅に続く農道を並んで歩いていて、ふと母を見たときでした。私は、中学二年生になっていたと思います。何時になく遠い山桜の花びらが、風に吹かれて山の中腹を飛び散っていた記憶があります。当時の母は、三十六、七歳ぐらいでしたから、世間から見れば熟した色気をぷんぷんさせていたに違いありません。母を一つ飛び越えたという、感慨が湧いたのを覚えています。

母は苦労をして私を地元の高校に行かせてくれました。高校に入ると同時に、それまでのパートから町工場の正社員となって事務の仕事をしていた母は、家に帰ってからも内職をしていました。私は自分の立場がよく分かっていたので、いい成績で高校を卒業し給料の高い会社に勤めたいと思っていました。母の収入だけでは生活費が足らないので家庭は貧しく、借金をしているようでした。

私は希望通りに、家から三十キロメートルほど離れた高山市のS薬品販売㈱高山営業所に就職しました。

そんな状況でしたから、私は自分の結婚について考えるだけの余裕はありませんでしたし、そういう経済的な問題のほかに、両親の離婚を目の当たりにしていたせいか、好きな人が現れてもその人を本当に幸せにすることができるのだろうかという思いが強くなって、結局のところはっきりしない性格だと言う烙印を押されて話が断ち切れになるのが常でした。

世の中には、物静かではっきりしないという男が良いという女性がいるのだということを知ったのは、佐々米子と出会ってからです。私は三十五歳になっていて、ひょっとしたら独身のままかも知れない、結婚しなければ離婚という苦しみは味わうこともないのだから独りでいるのも悪くはないなどと考えていた頃でした。出会いは何の変哲もないものでした。

当時、私は汽車通勤をしていました。佐々米子は、私の乗る次の駅で乗り込んできました。二両編成という短い列車でしたから、毎日座る席はおのずと決まってきて、米子は私の席の通路を挟んで反対側に座っていました。列車に乗るとすぐに大きめのハンドバックから文庫本を取り出しました。反対側の車窓を眺めた時に自然に米子が視界に入りました。そんなときは、必ずと言っていいほど文庫本を読みふけっていました。カバーが被せてあったので、小説だったのか趣味関係の本だったのかは分かりませんでした。

風邪をひいて職場の近くの個人医院に行ったとき、米子が看護婦として働いていたので私は内心びっくりしました。米子は、「えっ」とあからさまに驚きの声を出しました。車中ではおとなしいのに、職場では動きや言葉遣いが快活で、私は意外に思ったものです。

朝は挨拶を交わすようになりましたが、電車の中では米子は相変わらず本を読んでいました。そのうちに、米子の勤める個人医院に薬剤を降ろす契約が取れたことから、月に二三度は医院に顔を出すようになったのです。

冬の長い飛騨地方は、春になると季節がめまぐるしく変化します。梅の花が咲いたかと思えば、次には桜が満開になるといった具合で、あっという間に山は新緑に覆われます。薬のことで仕事が終わったら折り入って聞きたいことがある、と米子に言われ高山駅で待ち合わせることにしたのは、米子と挨拶を交わすようになってから半年ぐらい経った頃でした。

先に高山駅に着いたのは私の方で、待ち合わせの時間までまだ十五分ほどありました。私は今でもその十数分の間に考えたことを鮮明に覚えています。まず母の顔が浮かびました。当時母から折につけて、何時になったら結婚してくれるの、と言われていました。人を愛することに自信がないということを母に直接言うことは出来ませんでしたが、両親の離婚が自分の結婚を躊躇させている、ということを「離婚しないように、ちゃんと相手を選ばないとね」という言葉にして母に言ったことがあります。母は一瞬顔色を変えたように見えました。言ってしまったことを、私はすぐに後悔しました。何も母が悪いことをしていないのに、俺はなんていうことを言ってしまったのだ、としばらく落ち込みました。それから母は、私の結婚に対する苦言を呈しなくなったのでした。

私の頭に、改めて快活な佐々米子の仕事振りが蘇りました。私は米子にときめいているのが分かっていました。本来は自分から米子を誘いたいと思っていた時に、例え仕事の話だとしても米子の方から私を誘ったということは、嬉しいと同時に戸惑いの気持ちも湧いていました。

私は駅の入り口が見えるベンチに腰掛けていたので、米子が小走りで駅に入ってくるのが見えました。その顔は、笑みで覆われていて、なんだか張り詰めていたものがはじけたような拍子抜けした気持ちになりました。米子はしばらくの間は私の横に座って、新薬のことを尋ねていたのですが、ふっと会話が途切れるやいなや、「お茶でも飲みませんか」と言いました。私は自分の方から言うべきだったのにと、男として恥ずかしいものを感じたのでした。

それからというものは、自分でも驚くほどの早さで、あっという間に結婚という話に進みました。母は当時、五十路の半ばに差し掛かっていました。母と同居することに決めていましたから、私と米子との関係より、母と米子の関係がうまく行くのだろうかということが、心配の種になっていました。母親と嫁との折り合いが悪くて離婚したり、別居したりしていた友人を何人か知っていたのです。

ある時、それとなく母に米子のことを切り出しました。すると母は、まるで焼き栗がはじけたようにそわそわしだして、早く合わせて欲しい、と言うのです。そのことを米子に話すと、彼女はきりっとした顔をして「気に入ってもらえるかしら」と言いました。私が、「気にいられるに決まっているよ」と返すと、笑窪を作りました。

ただ、父のことは米子には話していませんでした。父と別れてから既に二十数年が経っていました。今頃何をしているのだろうか、住所が分かったなら結婚式に出てもらった方が良いのだろうか、などと考えました。米子が、「あなたのお父さんは？」と聞いたのでありのままの話をしました。ただ、私が結婚に対して抱いてきたわだかまりについては、とうとう話すことが出来ませんでした。

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県益田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「亥夢」主宰。短編で、「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（有）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

母と米子がはじめて会ったのは、私の家でした。母は一週間ほどの間、毎日のように玄関やトイレを掃除していました。私は、「ありのままを見せればいいじゃないか」と言いましたが、聞こえない振りをして、男には分からないのだとばかりに腕に力を入れて黙々と掃除に励んでいました。当日は、私が米子の家まで車を回しました。米子は何時になく凛としていて緊張している様子でしたが、「何もお袋と結婚するんじゃないんだから、いらない心配は必要ないよ。いつもの米子を見せれば大丈夫だから」などと言うと、いつもの笑顔が戻ってくるのでした。

米子が家に入ると、家の中が明るくなったような感じがしました。母はいつもと違って闊達に振舞いました。私は米子と一緒に座り、母と向かい合いました。

一通りの紹介を済ませるやいなや母は、お父さんはどんな仕事をしているのか、あなたは今の仕事を続けたいと思うのか、などと矢継ぎ早に質問を始めたのでした。

あまりにも根掘り葉掘り聞こうという母の気持ちが見えたものだから、私は「母さん、今日初めて会ったんじゃない。もっと違った話題は無いの」とやんわりと言うと母は、いや大切なことだから、と話を続けるのでした。

母は聞きたいことを一通り聞いてしまうと、食事の準備のために台所に向かったようでした。

私の携帯電話が鳴ったので、こんなときにと思いましたが、会社からだったのでその場を離れて仕方がなく出ると、仕事上のトラブルの指示を仰ぐ部下からでした。私は相応の処置を手短に命じて、電話を切りました。私が米子のところに戻ると、彼女は開け放たれていた仏壇に見入っているようでした。家から見える田畑はほとんど我が家のものだった程の資産家だったけれども、友人の連帯保証人になった祖父のせいで、家屋敷を除いてほとんどを取られてしまい、残った物で価値があるのは黒檀の仏壇だけだったと父が言っていた記憶があります。仏壇を見ながら、米子はつまらなそうにしていました。

私が座るやいなや、米子は「何だか尋問されているような気がしたわ」と言いました。私は慌てて、「いつもはあんなんじゃないんだ。今日のお袋はおかしいよ」と言いました。

急いで台所に行くと、機嫌がいい時に母が決まってするように、「りんごの歌」を口ずさんでいました。母に対する怒りが急にそがれましたが、それでも米子の顔を思い出して私は語気を荒げました。

「母さんは、僕たちの結婚を壊すつもりか」

母は、歌をすぐに止めて、少しうつろな目をしました。茶碗蒸しでも作っていたのでしょう、ガスコンロにかけられた深鍋から湯気が勢い良く上がっていました。私の気持ちが落ち着いてくると、突然、夜遅くまでミシンの内職をしている母の姿が脳裏に浮かんできました。私が二階で勉強している時に、階下からカタカタという単調なミシンの音が響いていたものですが、その音が聞こえたのです。私の怒りはすっかりと収まってしまい、ちょっと言いすぎたかなと、反省する気持ちさえ湧き起こってきました。

「お母さん、頼むね」と、私は言いました。母は、あまり精気のある顔ではありませんでしたが、それでも料理を作り出したのでした。

私は米子のいる部屋に戻りました。

米子は、庭を観ていました。何代も掛かって枝振りを整えてきたといわれている五葉松が庭の中心にあり、その右には父から、自分が植えたと聞いたことのある枝垂桜の枝に初秋のどこかしらひんやりした風が当たって、微かに揺れていました。

米子は私が戻ってきたことに気がついて、振り返りました。意外な事に米子は、「木を見ていると心が洗われるような気がするわ」と言ったのでした。「うーん」と、語尾を上げて水を向けると米子は言葉を継ぎました。

「菅原道真の歌に、東風（こち）吹かば匂いおこせよ梅の花　主なしとて春を忘れそ、という歌があるのよね。主人がいなくなった後も、梅よ毎年花を咲かせて、という歌なんだけど、人になんら関わりなく自然が回っているということは、不思議な気もするし毎日あくせくしていることは何なんだろうなって……。病院なんて気を使うし、心の安らぎが欲しいわ。あなたといるとなぜだか、とっても気持ちが落ち着くの」

その時庭で、鳥がチッチッと小ぜわしく鳴き始めました。見ると雀のつがいが松の小枝に止まって向き合い、まるで何かをおしゃべりしているようでした。代々の家系を持つことがなく気に入った異性と連れ合い、毎年子どもを育てる雀たちには、永遠に嫁姑の関係がないことに、私はふと気がつきました。

「道真はいい和歌をたくさん作っているね。それにしても、雀達は自由でいいねえ」と私が言うと、米子は「でも、雀のようにまったく自由だったら人生はつまらないと思いませんか？人間には知恵があっていい方向に乗り越えようとするから、それなりの苦労もあるけど生きていく価値があるような気がします」と言うのでした。

私は米子の言った哲学的ともいえる内容にとても驚きました。と同時に、母との関係について彼女なりに努力することを暗に言いたかったのだという気もして、改めて米子の聡明さを思い知ることになりました。人は経験と書物と、そして人から聞いた話を元に情報を整理し考え方を組み立てており、その中でも経験が一番重要な部分を占める、と何かで読んだことを、私は思い出しました。米子の知恵は相当な読書量からもうかがえるにしても、その一メートル五十五センチほどの小柄な体躯の中に、ぎっちりと詰め込まれている体験があるのだということを知りました。そして、結婚しようとしている女性のことを、私はほとんど知らないということに気がついたのでした。米子と私は廊下から庭を見ていましたが、そこに二脚の椅子とテーブルが置いてありどちらからともなく座って向き合いました。

（つづく）

文芸プラザ